

つる と やどりぎ

add_231

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

泉姉弟は仲がいい。それは双子だからなのか、それとも別の理由からなのか。やまなしおちなしいみなし。同性愛要素は無しです。

目次

むしのしらせ	1
こころここにあらざ	4
なんかのゆめ	8

むしのしらせ

大学が始まって半年も経つと、此処がどういった場所なのかにも大凡見当がつき、入学前の、あのわくわくは何処へやらと。短期間で随分と雰囲気の変わって行く周囲の同期を眺めながら、陰鬱になってしまう。

誰が誰々と付き合つたとか、誰が誰々と寝たとか、やれバイトが忙しいやら、やれ朝は起きられないやら、昨日は酒を何杯飲んだとか、畑の肥やしにもならないような、どうでもいい話ばかりが、時間を憚らず飛び交う。

講義中であつてもそれは変わらず、耳を塞いで突つ伏してしまいたくなる所、どうか講義を受ける体裁を保つていられるのには、私の二つ前の机、斜め右に座るひとりの男子学生の姿があるからだ。

一見、背筋を伸ばして真面目に講義を受けているかのように見えるが、手元に置かれた二枚のルーブリーフ。詳しい内容までは見えないが、そのうち一枚は確実に、講義とは関係無い内容で埋め尽くされていて、自分で書いては自分でくすくす笑ったり、時に怪訝な顔をしたり、ころころと表情がよく変わる。

普通そんな風にひとりでしている人がいれば、少し気味悪がつてしまうであろうが、

そうで無いのは彼の容姿が整っている事と、彼が纏う雰囲気はひどく柔らかく、暖かいものだからだと思う。見ていて飽きないとはこの事か。

ルーズリーフの上を、彼の細い指と、銀のシャーペンが踊るように走り、その動きは表情とリンクしていて、それは漫才とか、演劇とかを彷彿とさせるコミカルさを持つ。カチカチと芯を伸ばしたかと思えば、紙面に押し付けて戻していったり、トントンと拍子を打ったり、食い入る様に書き殴ったかと思えば、その一切を消してしまったりと、どんだんぼろぼろになっていく一枚のルーズリーフ。

しかし、毎度講義の終わる頃になれば、何だかごちやごちやとしたもので一杯になりつつも、どこか纏まりを得て完成し、満足気に一瞥するとこれまで散々作られてきたお仲間と共に、黒いA4のファイルに収められた。

それから間も無くして、教授の話は今日の講義のまとめへと入り始める。不思議な事だが、彼の一連の創作活動の終了に伴って講義が終わる事が多い。講義が長引く日も、短く終わる日もそれは変わらず、彼は何やらそういうものを察知する不思議な能力でも持っているのだろうか。若しくは教授が彼の手元に合わせて抗議しているのだろうか。それとも、彼は私だけに見える、時間を知らせてくれる非科学的な存在だったりするのだろうか。

今日も今日とて、彼がファイルを鞆にしまうと、教授から終了宣言が言い渡される。

教授が、とん、と資料を教卓で纏める音が響くと、既に彼は、講堂を出る所であつた。

こころここにあらす

恋は落ちるものなんだなあ、などと頭の悪い感想を抱く事になったのは去年の冬。めちゃくちゃに寒い市街中心部、時計塔の下での事である。

気紛れに、地下通路でなく、地上を歩こうと外へ出た事を後悔して、足早に友人との集合場所へ向かっていた途中。前から歩いてくるすこし背のでかい女が居た。

雪で狭まる歩道で、さて、俺が避けるか、あつちが避けるか、などと接近していくと、次第に彼女の顔がよく見える様になっていく。

スマホに夢中で、ひとりでにやにやと。ああ、これは男かな、お花畑野郎めなどと思っていると、彼女も俺に気が付いて、俺から見て道の右側へ寄る。

その際、俺を見た時の異常な迄の、あまりの無表情具合に、何だか傷つく心を感じながら、俺は左側へと寄る。まあ、知らない男に感情のこもった表情を向ける女もどうかと思うのだけだ。

とうとう距離が五メートルを割ろうかという距離まで近づくと、何だか、やけにいい匂いがあるではないか。なんだこれ。清涼剤的な爽やかさというか、仏壇のいい線香の

煙というか、植物をすり潰した的な、とにかく、あまりしつこくはない、乾いた系の匂いであった。

女性経験は少なくない、と思っている俺だったが、そんな匂い嗅いだ事も無く、初めは彼女の匂いだとは気が付かなかったくらいだ。

ついにすれ違う時が訪れる。

不思議な香りは最高潮に達し、ここでようやく、この匂いが彼女の匂いだと気がつく。この後味を残さない匂いが、寒くて痛い冬の日に妙にマッチしており、俺のこの女性に対する評価は、頭お花畑野郎から、ちよつと不思議なウインタークールビューティまで格上げされた。

ショートカットで、側頭部に入ったブロックは地肌が透けるほど。寒くは無いかかと。被さる髪の毛の裏と、その刈り上げられた部分の隙間の空間はいい匂いがしそうだなあ、などと、この時の俺は人生最大に気持ちが悪かった自信がある。

名残惜しいが、完全にすれ違ってしまってもう匂いは殆ど残っておらず、非常に名残惜しいけれども、俺にも友人との約束がある。

朝からいいものを見たなあ、と心を切り替えようとする、ほんの少し先、道の右側に財布らしきものが落ちている。

俺は拾って中身を見ると、お札も小銭も入っておらず、クレジットカード等、何枚か

カードが入っているのみだった。

その内学生証らしきものを見つけた俺は、それが俺と同じ大学である事に気がつき、顔を確認するために裏返した。

さて、そこに鎮座してましたのは、先程すれ違ったウインタークールビューティ。証明写真は先ほどの無表情と寸分違わぬ。ついでに、何と学年は俺と同じ。

これはチャンスだと、急いで踵を返して声を掛けると、彼女は体幹からぐるりと、振り返って俺と視線がぶつかる。

時が止まるとはこの事だ。間違いない、この時俺は落ちた。振り向く姿美しい。正にウインタービューティビナス。その唇奪いたい。

そんな衝動をどうにか押さえつけつつ、先ほどの姿を脳のどこかにやきつける。

彼女に落とした物を返すと、何とまあ、にこやかにお礼を言ってくれるのだ。触れ合った指は、残念ながら悴んでいて感触は分からなかった。そして、声は少し掠れている系で可愛かった。

何かあるかと少し期待したが、彼女はさっとそれをポケットにしまうと振り返って去ってしまった。

ちよつと残念だったが、大学も同じという事で会える機会はあるだろう。俺も振り返り、寒さも忘れて友人の元へ向かう。

そして、友人が彼女と友人であることを知り、無様に頼み込み彼女を交えた何らかの会を設定して貰える事になるのはこの後の事。

必要経費は焼肉三回。安いものである。

なんかのゆめ

「では、乾杯！」

幹事の掛け声で、大凡十五、六人での飲み会が始まります。

あちこちでグラスを打ち付け合う音が響くのですが、友達との飲み以外で同年代とのこういう会は初めてで、中々その輪に入れずおろおろしてしまいました。

この会主催の幹事のユウさんは、校内新聞というか、学内発行雑誌の編集をなさっているようで顔が広く、今回の面子は殆どが初対面というか、各地方から進学してきた人達が集められたようです。

かくいう私も、単身新潟から出てきて友人も少なく、札幌での生活も一年以上経ちますが、慣れた雪掻き以外には、未だに馴染めない感じが強いです。

この中で知っている人はというと、今回誘ってくれた友達のサナちゃん、その際お会いしたユウさん。後は、名前は分かりませんが同じ学科の綺麗な子と、何より私が密かに心を寄せている泉コウスケさん。そして彼の双子のお姉さんのチサキさんです。

私が今回、飲み会に出てみようと思つたのも、コウスケさんとお話できればいいなあ、という下心からだっただけです。

コウスケさんとはバレーボールの講義で一度、心理学の講義で何度か一緒になったことがあるのですが、とても優しく、温和な方です。

鈍臭い私がバレーボールで失敗しても、嫌な顔一つせずにアドバイスをくれますし、一緒に練習もしてくれます。ゲーム中も、常に動けるような場所にいて、ちよつと変なところにボールが上がってもなんて事無いように、自然にフォロワーを入れてくれました。

得点すると子供のようにはしゃぐのですが、なんとというか、その中にもお淑やかさというか柔らかさがあつて、見ているこっちも楽しくなつてきます。

体を動かすのがとても得意みたいで、ジャンプ力もとても高いですし、とても視野が広いなあ、と思います。

凄いスピードのスパイクを打つ時であれば、空いているスペースに優しくボールを落とす時もある、相手の方は随分苦労していたようです。

後は、頭もいいなあ、と思います。

講義中はよく、講義に関係ない事をしているのですが、何か質問されれば的確に答えますし、その言葉の選び方や文章の構成は、そっちが専門の私自身もとてもよく関心させられます。

話がとても分かりやすく、難しい専門用語などをなるべく抜きにして、誰が聞いても

分かるように話すのです。

かといって優しすぎるものでもなく、これまでの講義で出てきた用語はきつちりと抑えられているものですから、関係ない作業を咎めようとした教授もつつい感心しているように思えます。

何より私を気に掛けてくれるのが嬉しいのです。

講義で一緒になるのは、学部も違う事もあつて週に一、二度だけなのですが、それ以外でも、例えば学食で目が合うと微笑んでくれますし、廊下ですれ違ふと、手を振ってくれます。言葉の遣り取りこそ少ないのですが、そうした小さな交流で心がとても暖かくなるのです。

誰にでもそうなのだとは、彼の人気の高さから分かっているのですが、私も彼らと同じく、彼を好いてしまった一人です。

仕方ないですよ。

サナちゃんには日常的に相談していて、今回サナちゃんがユウさんから誘われた事で、サナちゃんから私も誘われた次第になります。

それで、参加したは良いのですが、コウスケさんと席は遠くなってしまうし、他の男性の方はなんだか圧が凄くて物怖じしてしまった次第です。

頼みの綱のサナちゃんですが、彼女は彼女で幹事のユウさん狙いらしく、じゃ後は頑

張って、と言い残して去ってしまいました。

そうなってしまうと私はもう、借りて来た猫。置物同然の存在です。

いつのまにか男性に隣を陣取られてしまい、私は身動きが取れません。

「ねえ、名前なんていうの。どこ出身？」

「あ、新潟、です」

「名前は？」

「……ユイです」

今まで体験した事の無い距離の近さに、なんだか無性に恥ずかしくなってしまうしどろもどろになりながら答えます。

その事すら恥ずかしく感じてしまい、顔に強く熱を感じていると、その男性は更に距離を詰めて来ました。

「うん、確か新潟ってお酒有名だよな。結構いける口だったりするのかな」

生温かい吐息が、私の首に掛かります。

「いえ、そこまで強くは……」

そもそもそんなへろへろになるまで飲みませんから、強いかどうかも分かりません。

吐息は既にお酒の匂いを強く含んでいて、感覚的にも、嗅覚的にも私は酷く気分が悪くなってしまう。

ちらりと見ると、彼の顔は少し赤みを帯びていて、その目からは酷く下卑めいた物が感じられます。後者に関しては私の反応が過敏なのかもしれませんが、彼の視線はやはり、私の腰や、胸あたりに頻りに動くものですから、やはり気分のいいものではありません。

私と言えた口でもありませんが、この男性も決して外見が悪い訳では無く、清潔感もありますし、何よりサキちゃん一押しユウさんの誘いで来られた方ですから、人間的にも悪い方では無いのだと思います。

単純に私が勝手に色々過剰に反応しているだけだと思いますし、彼にも悪気は一切無いのでしよう。

こういう場ではこの距離感が普通なのかもしれないし、私がまだ不慣れだということもあるのだと思います。

ですが、やはり不快である事に変わりはなく、美味しいはずのビールも味を失い、ただただ喉を通り過ぎていくだけでした。

そうして、ジョッキを二杯ほど開けた頃、私はどうとう耐え切れなくなってしまうして、トイレに行く、と伝えて一度外の風を浴びる事にしました。

何だか色々言われた気もしますが、ここで折れてしまつてはなし崩し的に良く無い事に繋がりそうでしたので、母から貰った、酔っ払いの言う事は聞くなという忠告に大人

しく従います。

逃げるようにして部屋を後にした私は、扉の外、掛けられた自分のコートに袖を通し、お気に入りのブーツをちよつと手間取りながら履いて、ふらふらしているのを自覚しながら外へ出ます。

外は晴れていましたが、気温は低く、寒いです。露出した顔や手は冷たく、道には薄く氷が張っているように見えるので、気を付けながら一歩前へ出ます。

冷たい冬の夜風が、不本意に火照った身体をよく冷やしてくれ、今日は何で来たんだろうなあ、なんて少し後悔しながら深く息を吐きます。

私を放置したサキちゃんは、悪い子です。ケーキくらいじゃ許してあげません。明日は今日の成果も含めてみっちりお話です。

幸い、携帯も財布も持つて来ていた私は今すぐにでも帰る事のできる状態です。携帯をポケットから取り出すと、サキちゃんに帰る旨を伝える為にメッセージアプリを開きます。

「もう帰っちゃうの?」

後ろから、優しい声が聞こえます。

少しびつくりしてしまいましたが、その声の主をすぐに察します。

本当は今日、この声が聞きたくてここに来たんです。

「遅いです。いつまで経っても話しかけてくれないので、私帰っちゃいます」

何様ですか、私。彼は友人も多く、今日だって何人も女の子の所に囲まれてました。数多くいるそんな子たちの中で、わざわざその内の一人であろう私の所に来る理由はありません。

振り返ると、黒いシンプルなダウンを羽織って、白い吐息を漏らしてる彼と目が合います。

「いや、マサと仲良くしてたから邪魔したら悪いかな、と思つて」

初めて見る、困つたような顔で答える彼は、何だか悪戯を咎められる子供みたいで少し可愛らしいです。

そんな彼も少し酔っているようで、顔は少し赤らんでいて、目もいつもより眠たげです。

「私、困つてたんですよ」

なんだか開き直ってきました。

ちよつと怒ってます。

私はあなたがいるからここに来たのに、あなたは私を何とも思つてない。何だか狡いです。

「私、あなたともつと仲良くなりたくて今日来たんです。いつか一緒にご飯を食べたり、

映画を見たり、お酒を飲んだりしたくて今日来たんです」

お酒の所為でしょうか。いつもは言えない事が、どんどん、どんどん溢れ出して来ます。何だか、今はいつもより強気になりました私です。

「ユウさんでも、マサ、さんでもない。貴方と、仲良くなりたくて来たんです、私」
ましましでも、好き、とは言えない私にちよつとむかつかますが、これが今の私の全力です。

まっすぐ彼を見つめます。逃がしません。私、目力の強さには自信があるんです。私とは、目で会話してた貴方なら、優しい貴方なら気が付いて欲しい。

きよとんとする彼に、これでもかと念を送ります。
すると。

「あー……」

と、私の鬼気迫る何かを感じ取ったでしょうか、彼はちよつと視線をずらします。お酒の所為で顔色が読めないのが残念です。

視線がうろついて、口元に手を当てます。

知っている動作、彼が深く考えている時の癖の筈です。

これは立場逆転でしょうか。どきどきさせられる側から、どきどきさせる側に、攻守交代でしょうか。

何だか、さっきまでの憂鬱は何処へやら。心が踊ります。暫くして、彼と再び目が合います。

「……俺はさ——」

「コウスケ、いつまで外に出てるの。風邪ひくよ」

そこで、もう一つ。声が混じりました。

綺麗な声です。彼に似た、優しい音色が含まれます。

ですが、その中に、明確な棘のようなものを、私は瞬時に悟りました。

「ん、チサ。今ちよつと大切そうなお話を」

女性としては珍しい、ツーブロックという髪型で、何より彼と顔が瓜二つなものですから、彼女の事も当然、私は覚えていました。

ですが、彼女が私を見る目に、彼のような暖かさは一切無く、射抜くような、刃物のようなその鋭さに、急速に、私の身体と、心さえも熱を失っていきます。

「また今度の機会にしなよ。今日は寒いし、風邪ひいちゃうよ」

しかし、その瞳が彼に向いた途端に、それは彼とよく似た優しさを含むものへと変わり、私は薄々と悟ります。何をかと言いますと、以前誘われた時にユウさんから聞いた言葉です。

ある程度、覚悟しといた方がいいと思うな。

唐突に再生された言葉の意味を少し、理解しました。

「それに、貴方も帰るんでしょう。女の子何だから、あんまり寒い所に居ると体に良くないわ」

再び鋭い目を私に向けて言う言葉は、明確に、早く帰れという意味を隠そうともせず、に含んでいました。

「タクシーの方がいいかもね。この時間だと貴方みたいな子は危ないわ」

畳み掛けるように続けられ、私は酷く気圧されてしまいます。

私が戸惑い、一時停止している間に手早くタクシーを止めた彼女は、空いたドアへと私を誘います。

私はどうにも、抵抗する意思を失ってしまい、言葉にもならない音で返事をしながら、そちらへと歩いて行きました。

「あ、ちよつと待って」

すると彼が、急に私の手を握ります。

冷めた心にちよつとの温もり。

「これ連絡先。落ち着いたら登録しといて。今度一緒にご飯でも行つて、さっきの話の続きをしよう」

咄嗟に書いたのでしょうか。ちよつとくしゃくしゃになった小さな紙片が手渡されま

した。

彼は、私と彼女のやり取りに何も感じないのでしょいか。いつものような優しく、暖かい口調に少し心が和らぎながら、私はちよつと思つてしまします。

この、鈍感男。

「うん、ありがとう。帰つたら、絶対連絡しますね」

少しだけ元気が出ましたが、でももう、あそこに帰る元気はありません。

何より情けない話ですが、先程から身体に突き刺さる視線にこれ以上耐えられる気がしないのです。

名残惜しいですが振り返つて、タクシーへと再び歩きます。

振り返つた先には彼女が、未だ私への何か鋭い感情をびりびりと放出し、タクシーの横に立っています。

なんとか無視して、どうにかタクシーの淵に手を掛けました。

もう逃れてしまいたい。

扉にかけた手を、ゾツとするような冷たさで握り締められました。

「あげないから、貴方にも」